

# ヴェルナー・ゾンバルト研究文献

池田浩太郎

1. まえがき
2. ゾンバルト研究文献の第1期および第2期
3. 「最近のゾンバルト研究文献」：ゾンバルト研究文献の第3期
4. 本稿のむすび

## 1. まえがき

成城大学経済学部での40年来の同僚であった山田高生名誉教授の、古稀を祝う記念論文集が公刊されることになった。これに執筆させていただけることは、私にとって誠に感慨深いものがある。

山田教授のお名前とともに私が直ちに思い起こすいくつもの事柄の内、私にとって特に深い縁を感じるものは、私の在外研究にかかわる件である。

私の最初の在外研究は、昭和37年8月より一年近くの間のドイツ・ハンプルク大学のフォークト教授 (Fritz Voigt, 1910–1993) のもとであった。これには私の恩師井藤半彌先生門下の直近の兄弟子であり、山田教授のゼミ指導教官でもあった太陽寺 (菅) 順一一橋大学教授も行を共にすることになった。宿所も二人同じ所であった。

私の第2回目の在外研究は、昭和42年6月から約一年間、ドイツ・ボン大学においてであった。すでにボン大学に移られていたフォークト教授が、成城の教授となっておられた山田高生氏と私とを、それぞれ DAAD, フンボルト財団からの資金援助の斡旋の労をとられた上で、ボン大学に呼んでいただいたものであったのだ。宿舎も二人同じくボン大学のゲストハウスであった。

さて、山田教授古稀記念論文集への執筆は願ったものの、私の執筆できるもので、多少とも山田教授の古稀を祝う意味をももちうるようなテーマないし内容には、一体どんなものがあるであろうか。私は思いあぐねていた。その末に私が思いを致したのは、次のような事柄であった。

山田教授は学生時代、20世紀ドイツの最高の社会学者、経済学者の一人であるマックス・ウェーバー (Max Weber, 1864–1920) の学問的業績に接し、非常に深い感銘を受けられた由である。そしてウェーバーへの畏敬と彼の学問的業績を自らのものとすべき研究への情熱こそが、氏の学問研究への心構えと出発点を形成し、かつそれを持続させる支えとなった由である。

ウェーバー研究ですぐれた業績をあげつつも、氏はやがて社会政策学へと研究関心の中心を移されてゆかれた。そして周知のようにその研究は、「ビスマルク失脚後の労働者参加政策」の副題をもつ、本文600ページ近くの大著『ドイツ社会政策史研究』千倉書房、平成9年をはじめ、いくつもの著・訳書、論文となって結実しているのである。

かえりみれば私も、同じく20世紀ドイツ最高の経済学者、社会学者の一人であるヴェルナー・ゾンバルト (Werner Sombart, 1863–1941) の学問的業績の研究を、自らの卒業論文のテーマとし、また学究生活の出発点にえらんだ。そしてやがて財政学研究へと研究関心の中心を移していった者である。

山田教授および私の研究経歴の推移のタイプの、以上のような類似性を思い起こす。しかも歴史的、現実的にいえばウェーバーとゾンバルトとは、同年代の盟友であった。のみならず二人は、ドイツ社会科学界での新世代の旗手として共同戦線を張った「道連れ」(Weggenosse)であり、「戦友」(Mitsstreiter)でもあったのだ。私はこのような事情に思いを致したのである。

そして結局、私は執筆するテーマないし内容を、私のゾンバルト研究の領域の内から見つけ出すことにしたのである。ただし私も、ゾンバルト研

究に関して書いてみたいと思った事柄については、すでにかかなりの程度公表してしまっている<sup>1)</sup>。そこで此の度は、「ヴェルナー・ゾンバルト研究文献」といったテーマで執筆し、もって山田教授への古稀のお祝いとしたい。ただしこの論考は、筆者の手許にあるわずかな文献、資料のみを手がかりとするものである。きわめて不十分、かつゾンバルトのオールド・ファン  
の偏った覚え書き風のものになってしまうおそれが多分にあるであろう。このことを予め山田教授におゆるし願っておきたい。

## 2. ゾンバルト研究文献の第1期および第2期

本稿のテーマである「ヴェルナー・ゾンバルト研究文献」について論述するにあたり、私はこれをその公表年次に従って見てゆくための第一歩として、便宜的に次の三つの時期のものに分けて考察してみたいと思う。すなわち、

19世紀末頃のゾンバルトの学界デビューからその死に至る1941年までのものを、第1期のゾンバルト研究文献と名付ける。

次いで、それから彼の没後半世紀頃までの間、すなわち、1990年代はじめ頃までのものを、第2期のゾンバルト研究文献と名付けよう。

そして、20世紀を締め括るべき1990年代はじめ頃から21世紀はじめ

---

1) これについては私は雑誌「成城大学経済研究」に次のような論文を公表させていただいている。

まず、私の若い時代のものに次の二点がある。

「ゾムバルトの社会主義思想——その本質——」同誌第2号、昭和29年10月。

「ゾムバルトの社会主義思想——その生成過程——」同誌第3号、昭和30年2月。

最近のものには「ゾンバルトとその周辺の人々」という副題をもつ次の三編がある。

「アードルフ・ワグナーとヴェルナー・ゾンバルト」同誌第150号、平成12年11月。

「マックス・ウェーバーとヴェルナー・ゾンバルト」同誌第151・152合併号、平成13年3月。

「ゾンバルトと日本」同誌第153号、平成13年7月。

の2004年の今日までの期間のゾンバルト研究文献、換言すれば、最近のゾンバルト研究文献が第3期のもの、というわけである。

本稿では、最近のゾンバルト研究文献、すなわち、第3期のそれにやや力点をおきつつ論述をすすめてゆくつもりである。

それゆえまず、第1、第2の期間におけるゾンバルト研究文献のきわめて簡単な紹介から論述をはじめよう。

その第1期とは、ゾンバルトの生存中の時期、ないしは学問的活動中の期間である。

19世紀末に社会主義・マルクス主義学説の理解者として、学界に華々しくデビューしたヴェルナー・ゾンバルト。経済学史的には彼は、ドイツ新歴史学派経済学の新世代の、最高のしかも最後の巨匠であるといわれる<sup>1)</sup>。まことに彼は、資本主義の用語 (Kapitalismus) をはじめて学界ならびに一般社会に定着、普及させ、経済体制としての近代資本主義の歴史的・体系的把握を通し、これを学界共有の財産とするのに貢献した。彼の著書の改訂第2版『近代資本主義』三卷六冊、1916-1927年 (Der moderne Kapitalismus, 3 Bde., München und Leipzig 1916-1927.) こそは、ドイツ新歴史学派経済学の最高かつ最後の金字塔、とまでいわれている。

この間ゾンバルトの学究生活の出発点での指導教官であったシュモラー (Gustav Schmoller, 1838-1917) やワーグナー (Adolph Heinrich Gotthilf Wagner, 1835-1917) をはじめ、その他の学問研究上の先輩や同輩であった人々の、折にふれてのゾンバルトの人柄や学問的業績にたいする評価については、ここでは述べないことにしよう。これら評価の内のある程度のものについては、既にあげたゾンバルトに関する拙稿で取りあげているからである。

さて、この第1期においてもすでに主としてゾンバルトの後輩学究の手

---

1) 私はひそかに、マックス・ウェーバー、オーストリア学派のヨーゼフ・シュンペーター (Joseph A. Schumpeter, 1883-1950) と並んで、ゾンバルトは20世紀ドイツ最高の三大経済学者の一人である、と考えている。

になるゾンバルト研究に関する著作は、いくつも公刊されている。これらの内、筆者の手許にある主要なものを公刊年順に並べてみよう。

- 1) Friedrich Pollock, Sombarts „Widerlegung” des Marxismus, Leipzig 1926.
- 2) Arthur Nitsch, Sombarts Stellung zum Sozialismus, Leipzig 1931.
- 3) Gustav Adolf Groß, Die wirtschaftstheoretischen Grundlagen des „Modernen Kapitalismus” von Sombart. Eine kritische Untersuchung vom Standpunkt einer sozialindividualistischen Wirtschaftsauffassung, Jena 1931.
- 4) Mortin J. Plotnik, Werner Sombart and his Type of Economics, New York, 1937.

そもそもゾンバルトの主要な学問的業績は、二つの系列ないしグループに分けることができよう。一つは社会主義に関する研究業績のグループであり、もう一つは資本主義に関するそれである。ここにあげたゾンバルト研究四文献の内、第1、第2のものはゾンバルトの社会主義に関する研究業績グループの研究書であり、第3、第4のものは、おおむねゾンバルトの資本主義に関する研究業績の研究書に属するものである、といってよいであろう。

19世紀末にエンゲルスをして、「ブラウンの『社会立法アルヒーフ』第7巻第4分冊〔の論考 Zur Kritik des ökonomischen Systems von Karl Marx, 1894.〕で、ヴェルナー・ゾンバルトはマルクス〔学説〕体系のアウトラインの、全体的にすぐれた論述をしている。ドイツの大学教授というもので、全般的にマルクスの著作の内に、マルクスが本当に述べた所のものを見てとることを成就した、はじめてのことである。」(Friedrich Engels, 1820–1895, Ergänzung und Nachtrag zum III. Buche des „Kapital”, 1895.) といわしめたゾンバルト。そもそもゾンバルトの社会主義に関する研究業績グループの内

は、彼を華々しく学界にデビューさせた小著作『19世紀における社会主義と社会運動』1896年 (Sozialismus und soziale Bewegung im 19. Jahrhundert, Jena 1896.) の系列の諸著作が最重要なものとなるであろう。すなわち、この著作およびその改訂諸版、およびその新訂第10版として全二巻1,000ページを超える大著となった『プロレタリア社会主義 („マルクス主義“)』1924年 (Der proletarische Sozialismus („Marxismus“), 2 Bde., Jena 1924.)。それから10年の後、すでにヒトラーが政権を掌握していた1934年に公刊の『ドイツ社会主義』 (Deutscher Sozialismus, Berlin-Charlottenburg 1934.) がこの系列に属する主要なもの、とってよいであろう。

さて研究文献1) は、本文80ページの小冊子である。ここではゾンバルトの『社会主義と社会運動』の新訂第10版『プロレタリア社会主義』全二巻、1924年の内在的検討をする。そしてこれを通して、この著作が、この書の以前の諸版に見られたような、社会主義理解者の・マルクス主義理解者のゾンバルトという像から、彼がいかに根本的に離反して、ロマン主義的反動化してしまっているか、また読者の社会主義の科学的論述への期待をゾンバルトがいかに裏切ってしまったのかを、著者は示そうとしているのである。

研究文献2)も、本文91ページの小著作である。ここではゾンバルトの社会主義に対する態度の変化の推移 (反社会主義化, 反マルクス主義化) が、ゾンバルトの19世紀末頃から第1次世界大戦を経て1920年代末頃までにいたる間の、社会主義に関連する多くの業績をもとに、批判的に論述されている。そしてその変化が、ドイツのその時々 of 社会的・文化的状況にどの程度条件づけられていたかを、検証しようとしているのである。

研究文献3) は、ゾンバルトの資本主義に関する業績グループについての研究文献の系列に属するもの、とってよいであろう。本文158ページに達する本書は、その副題の示すとおり、カルテル、(トラスト、コンツェルン)の研究で功績のあったリーフマン (Robert Liefmann, 1874-1941) の特

異なる経済理論を基礎にしたものであった。シュンペーターによれば、リーフマン自身は自己の経済理論の独自性を主張してはいるが、これはオーストリア学派の経済理論の主要内容の特に不都合な表現に他ならないものようである (Joseph A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, New York, Oxford University Press, 1954, p. 854.)。とにかくこの書物で著者グロースは、リーフマン流の社会個人主義的経済把握の立場から、ゾンバルトの『近代資本主義』の経済理論的基礎について、批判を試みたのである。

研究文献4)は、プロトニクという当時の英米系の若い学徒の英文で書かれたものであり、本文は132ページである。これはゾンバルトの生涯と彼の学説の全容との概説的ないし解説的論述ではある。<sup>1)</sup>しかし、この書物の論述の中心的部分に目を向けると、研究文献3)と同じく、ゾンバルトの資本主義に関する業績グループの研究文献に数えても一応よいのではなかろうか、と思われる。すなわち、本書の主要部分である第3部では、ゾンバルトの学問的業績のタイプを、社会理論、経済学方法論、資本主義経済体制、経済の理論と歴史、等々の側面から論述しているからである。

第2次世界大戦最中の1941年のゾンバルトの死去以降、20世紀を締め括るべき1990年代に入る頃までの、約半世紀に亘る期間が、ゾンバルト研究文献公刊の第2期である。この期間で社会科学者が最も留意すべき背景は、この期間がまず、第2次世界大戦と1945年のドイツの敗北を経て、世界の資本主義的西方世界とソ連、東欧、中国などの社会主義的東方世界とへの分裂と、東西両世界の間に互いの緊張関係を生じさせたことである。

---

1) ウェルナー・ゾムバルト著・戸田武雄訳『社会政策の理想』有斐閣、昭和14年、においては、「訳者序説 1、ウェルナー・ゾムバルトの生涯」(前掲訳書、1-42ページ)の記述を、主としてこの研究文献の24-43ページを適宜訳出する形ですませていることを、ここに付記しておきたい。

その結果、余談ではあるが、この訳書の1ページほかで、ゾンバルトの生地がエメルスレーベンとされてしまっている。しかしこれは、プロトニクの原著24ページで *Emersleben am Harz* となっているのを、そのまま使用したものであろう。正しくはエルムスレーベン *Ermsleben am Harz* である。

ドイツを中心に考えると、これは「ベルリンの壁」に象徴される東西ドイツへと国が分裂し、互いの緊張関係がはじまったことでもある。しかもやがてまた、これらの事態の解消がはじまるまでの約半世紀の間が、この第2期であったのだ。

第2次大戦下という事情も加わってか、死去したゾンバルトへの追悼の意を示す、独立した著作の形での記念論文集は公刊されることはなかった。またこの期間に、ゾンバルトの論考や遺稿などを編集して著書の形にしたものには、次の二点がある。ゾンバルトの社会学関係の論考五編を集録し、彼の息子ニコラウス (Nicolaus Sombart, 1923-) の序言を付した著作 Werner Sombart, *Noo-Soziologie*, VII + 123 S., Berlin 1956. およびゾンバルト晩年の助手 Walter Chemnitz 編集のゾンバルトの講義やゼミ演習にもとづく著作 Werner Sombart, *Allgemeine Nationalökonomie*, 237 S., Berlin 1960. がこれである。

およそ半世紀にもおよぶこの期間に公刊されたゾンバルト研究の単行書は、意外に少ないようである。私の手許にあつて注目すべきものは次の二冊のみである。

- 5) Georg Weippert, 1899–1965, *Werner Sombarts Gestaltidee des Wirtschaftssystemes*, Göttingen 1953.
- 6) Werner Krause, *Werner Sombarts Weg vom Kathedersozialismus zum Faschismus*, Berlin 1962.

研究文献5)は、ドイツ新歴史学派経済学の最後の巨匠であるゾンバルトの、近代資本主義研究の経済学的基礎である経済体制の考え方への、科学としての経済学の哲学的・方法論的視点からの批判的考察に終始している論述であり、162ページの著作である。ここでの論述ないし批判の対象の中心に据えられているゾンバルトの業績は、ゾンバルトの「ライフ・ワークのいわばカタログとなるはずのもの」でもあった方法論的著作『三つの経済学』1930年 (*Die drei Nationalökonomien. Geschichte und System der*



Lehre von der Wirtschaft, München und Leipzig 1930.) であった。

『ヴェルナー・ゾンバルトの経済体制の形成理念 (Gestaltidee)』という標題の用語法から想像されるように、研究文献5)の著者のワイベルトは、一応ゴットル (Friedrich von Gottl-Ottlilienfeld, 1868–1958) の門弟であり、有名な『社会科学辞典』(Handwörterbuch der Sozialwissenschaften, 12 Bde. und 1 Registerband, Stuttgart, Tübingen und Göttingen 1956–1968.) での項目「ゾンバルト」(第9巻所収)の執筆者でもあった。

研究文献6)は、著者が当時の共産圏東独ベルリンのフンボルト大学経済学部に提出した学位請求論文から生まれたものである。『ゾンバルトの講壇社会主義からファシズムへの道』のタイトルからも推測されるように、それは直接的には、ゾンバルトの社会主義に関する諸業績の、時の推移にしたがって変化してゆく様相を追求したものである。ただし、著者クラウゼの拠って立つ所は教条主義的マルクス＝レーニン主義の立場であり、唯物弁証法的経済学を唯一究極的に正しい経済学とする立場であった。それゆえ、この立場から、ゾンバルトを徹底的に批判することになったのである。そして結局、ゾンバルトは若い時代からすでにブルジョア・イデオログであり、マルクスへの裏切者であり続けた、と斬り捨ててしまった。クラウゼは、ゾンバルトの思想や業績について、これを彼の精神的・内面的苦悩や努力の成果という側面からは、跡づけようとはしなかったのである<sup>1)</sup>。

クラウゼはその後も経済学史的研究とその成果の公表を続け、ついには経済学史家としての権威を東独で認められるまでになったようである。そしていわば共産主義国東独の、国定ドイツ経済学史教科書のようにも思われる、ルードルフ (Günther Rudolph) との共著 Grundlinien des ökonomischen

---

1) クラウゼのこの著作の内容の紹介と批判については、かつて私は「成城大学経済研究」第19号、昭和39年3月所収の「書評」で比較的詳細におこなったことがあるので、これを参照されたい。

mischen Denkens in Deutschland, 1848 bis 1945, Akademie-Verlag · Berlin 1980. を著わすまでに至ったのである。これはまさに、600 ページを超える文字通りの大著であった。ただし、この時期以降のクラウゼの消息については、筆者はこれを詳らかにしえないでいる。

### 3. 「最近のゾンバルト研究文献」：ゾンバルト研究文献の第3期

ゾンバルト研究文献の第3期は、ここではおおよそ1990年代はじめ頃より2004年の今日までのそれをさす、ということにしよう。それゆえ、換言すれば、ここではゾンバルト研究文献の近況を報告することになるであろう。

では、いかなる背景があつて私がこの時期を、それ以前の半世紀におよぶ第2期と区分しようとしたのか。それは1990年代はじめ頃を境に、ゾンバルト研究文献の量的・質的様相に、ある程度の変化が見られた、とも考えられるからである。

社会科学研究者の視点から、20世紀も終りに近いこの時期で最も注目すべきことの一つは、1990年頃を境に、20世紀前半から半ば頃までに成立した大小の社会主義国の大半が、社会主義国としては消滅してしまうか、ないしはかなりの程度の変貌をとげてしまった、という世界史的な事実である。ゾンバルトの祖国ドイツを中心に考えると、この時期にいわゆる「ベルリンの壁」の崩壊、すなわち、社会主義的東ドイツが民主主義的西ドイツに併合される形で国家の姿を消すことになったのである。

このような世界史的・ドイツ史的变化の状況も時代の背景に加わって、いわば20世紀を締め括るべき1990年代はじめ頃から、20世紀ドイツの代表的経済学者の一人ゾンバルトへの総括も盛んになったのであろう。しかも1991年は、まさにゾンバルト没後50年を記念すべき年でもあったのだ。このような状況もゾンバルト研究文献の在り方に反映されることにな

ったのかも知れない。

この第3期に公刊されたゾンバルトの著作には、2002年ゾンバルト研究者でもある二人の学者が、ゾンバルトの学問的業績の内から選択編集した、次のものがある。

Werner Sombart, *Nationalökonomie als Kapitalismustheorie, Ausgewählte Schriften*, herausgegeben von Alexander Ebner, 1967– und Helge Peukert, 1956–, Marburg 2002.

この著作に収められているゾンバルトの業績には、まずその巻頭に、有名なドイツ学術雑誌に掲載され、わが国でも既述した戸田武雄教授の訳書として公刊された論文「社会政策の諸理想」1897年 (*Ideale der Sozialpolitik*, 1897.) がある。そしてその最後の第10番目には、ゾンバルトの小冊子『資本主義の将来』1932年 (*Die Zukunft des Kapitalismus*, Berlin 1932.) が収められている。これは全巻465ページにもものほる大著である。

この著作の巻頭論文と第10番目の作品との間には、その公表年次順に、ゾンバルトの六つの学術雑誌論文と百科事典に執筆の一項目、およびいわゆる GDS (*Grundriß der Sozialökonomik*, 4. Abt., Tübingen 1925.) への執筆の一つが配されている。

またこの時期になると、単にゾンバルトの学問的業績の紹介や批判にとどまらず、その人柄などをしのばせる論述をする学者もでてきている。

中村英雄成城大学名誉教授や大島通義慶応大学名誉教授など、わが国にもその門を敲いた学者の多いケルン大学の財政学教授シュメルダースの論述「ケインズ以前のベルリン大学景気理論と景気政策」1990年 (*Günter Schmolders, 1903–1991, Berliner Konjunkturtheorie und –politik vor Keynes*, in : *Beiträge zur Wirtschaftswissenschaft in Berlin. Geschichte und Gegenwart*, herausgegeben von Burkhard Strümpel, Berlin 1990.), がその一例である。

ここに見られる、アメリカ帰りの若きベルリン大学私講師時代のシュメルダースの、学部でのその教授資格取得講演「アメリカ合衆国の景気政

策」をめぐるエピソードは、ゾンバルト研究者にとっても一読に値するかも知れない。当時そこには、烈しくするどい判定をし、同僚教授たちの学問的努力にたいしては若干傲慢な態度でおそれられ、また若い人たちの研究成果にしばしば否定的態度を示すことでもおそれられていた大教授、ゾンバルトの壁があった。この大きな壁をシュメルダースが、いかに幸運にも乗り越えることができたか、が述べられているくだりがそこにあるのだ。

また、最近の10年あまりの短い期間をさすこの第3期に至って、漸くゾンバルト研究を専らとする本格的な単行書が、比較的多く公刊されはじめ、今日に至っている点にも注意すべきであろう<sup>1)</sup>。

筆者の手許にある、この時期に公刊された注目すべき本格的ゾンバルト研究の単行書を、年代順にあげてみよう。

7) Michael Appel, Werner Sombart. *Historiker und Theoretiker des modernen Kapitalismus*, Marburg 1992.

アペルのこの著作は、1990年にミュンヘン大学に提出された彼の学位請求論文が基礎となったものである。これはゾンバルトの近代資本主義研究に関する諸業績の、理論的・歴史的分析を中心においた、339ページにも達する研究文献であり、一応力作の名に値するものといえるであろう。

ここでは簡にして要をえたゾンバルトの知的経歴の紹介の後、ゾンバルトの近代資本主義研究の経過とその成果への分析がなされている。併せて、いわば歴史的社会学を展開したともいえる、ゾンバルトの資本主義研究の成果への、当時およびその後の時代の内外学界での評価も紹介、批判されている。

---

1) したがって、ここではゾンバルト研究がその一部に含まれているだけの単行書はカウントしないことにしたい。たとえば、

Gustav Schmoller (1838–1917) and Werner Sombart (1863–1941), *Pioneers in Economics* 30, Edited by Mark Blaug, An Elgar Reference Collection, Cambridge, 1992.

には、バックハウス教授 (Jürgen Backhaus, 1950– ) の論文のほか、二編のゾンバルト研究論文が収載されている。

ゾンバルト没後半世紀あまり後の1994年には、まさにゾンバルト研究文献と称するに相応しい、彼の学問研究の生成の経過を中心に据えた本格的なゾンバルトの伝記が公刊されることになった。すなわち、次の文献がこれである。

8) Friedrich Lenger, 1957-, Werner Sombart, 1863-1941. Eine Biographie, München 1994.

本書の著者レンガーは、当時テュービンゲン大学歴史ゼミナールの私講師であり、19世紀、20世紀の社会史、科学史などの研究をしていたようである。そして1994年に彼のテュービンゲン大学史学部への教授資格取得論文として、全巻570ページにも及ぶこの大著を執筆、公刊したのである。この著作は、歴史家らしい、綿密な資料的検討をもとに叙述された、20世紀ドイツ最高の経済学者・社会学者の一人ゾンバルトのすぐれた学問的伝記である。そのゆえにこの著作は、ゾンバルトの伝記のスタンダード・ワークともなり、賞も授けられた由である。

レンガーは、上述したアベルの著作をも含め、以前に公表されたいくつものゾンバルトの伝記類、学問的業績への批判や研究などを検討した。彼はさらにゾンバルトの残したもの(Nachlaß)やその他の多くの資料をも調査した。その上でこの著作をもって、学者文化(Gelehrtenkultur)、社会科学、政治という三つの独自性のある中心的研究軸の編成をもつ、ゾンバルトの年代記的把握を志したのである(レンガー、前掲書、23ページ)。

本書の本文部分は二部に分かれている。第1部「正教授のポストまでの長い道のり」では、ゾンバルト家およびヴェルナー・ゾンバルトの生誕の叙述からはじまり、アードルフ・ワーグナーの後任として、1918年55歳で彼がベルリン大学正教授に就任するまでの経過と彼の業績などについて、論述されている。

本書第2部「教授閣下」(Der Herr Geheimrat)では、ベルリン大学正教授就任から1941年の死去に至るまでのゾンバルトに関して、その経過と業

績などについて、第1部と同様の仕方を取り扱っている。

ここでは、これ以上本書の内容に立ち入るつもりはない。かわりに本書の叙述の内で、日本ないし日本人に直接関連する箇所二つを指摘するにとどめたい。いずれも1920年代の出来事である。

一つは、第1次世界大戦後のドイツの破局的インフレーションがはじまろうとする1923年のはじめ、ベルリン大学正教授のゾンバルトが、当時の安定通貨米ドルでの月謝支払いを条件に、日本人留学生馬場誠長崎高商教授への個人レッスンを受け容れざるをえなかったことである。

もう一つは、現役の大学者でありながら、自らの蔵書を一括売却せざるをえなくなり、紆余曲折の末、1929年大阪市立大学がこれを購入することになったことである<sup>1)</sup>。

1996年には、著名な経済学説史家であるバックハウス教授の編集にかかる、全三巻という大部の英文ゾンバルト研究論文集が公刊されることになった。さらにその四年後の2000年には、いわばこの三冊本の総括版ともいべきドイツ文でのゾンバルト研究論文集も、バックハウス編で刊行されるに至ったのである。すなわち、次のとおりである。

- 9) Jürgen Backhaus (Ed.), Werner Sombart (1863–1941), *Social Scientist*, 3 vols.,

Volume 1 His Life and Work

Volume 2 His Theoretical Approach Reconsidered

Volume 3 Then and Now

Marburg, 1996.

- 10) Jürgen Backhaus (Hrsg. v.), Werner Sombart (1863–1941) – *Klassiker der Sozialwissenschaften. Eine kritische Bestandsaufnahme*, Marburg 2000.

---

1) いずれもレンガー、前掲書、259–277ページを参照。また前掲拙稿「ゾンバルトと日本」第2節 2, 3をも参照されたい。

編集者のバックハウス教授は、つとにドイツ新歴史学派経済学の最後の巨匠といわれるゾンバルトの学問的業績研究を推進してきた経済学史家でもある。

1989年公表の論文「ゾンバルトの近代資本主義」(Sombart's Modern Capitalism, in: KYKLOS, vol. 42, 1989.)では、バックハウスはゾンバルトの主著『近代資本主義』第2版について、経済体制など、この書での基本的諸概念、全三巻六冊の構成を示す諸表示、この書物から近代経済学者たちが学ぶべき諸点、等を論述してきた。

そしてバックハウスのこの論文は、先の注で既述したブローグ編の「経済学の開拓者たち」シリーズの第30巻『グスタフ・シュモラーとヴェルナー・ゾンバルト』1992年に再録されるものとなったのである。

さて、ゾンバルト没後50年にあたる1991年、これを記念してネッカー河畔の町ハイルブロン(Heilbronn)でドイツ語を母国語としない欧米諸国などの社会学者30名余も参加のもと、いわゆるゾンバルト・シンポジウムが開催された。元々ハイルブロンはドイツ新歴史学派経済学の創始者シュモラーの生誕の地である。ここでは以前よりドイツの社会科学に関する小国際学会が催されてきたようで、このゾンバルト・シンポジウムはその第3回目であったようだ。

1991年のこのシンポジウムは、まさにゾンバルト再評価の大々の開始、ないしはある種のゾンバルト・ルネッサンスの開花の契機であったともいってよかろう。そしてその開花は、やがてこの小さな国際学会の幹事でもあったバックハウス教授の尽力によって実を結ぶことにもなった。すなわち、彼はこのシンポジウムを機に、ゾンバルト研究者でもある多くの学者たちに、それぞれの関心分野ないし視角からのゾンバルト論の執筆を求め、これらを収集編集して1996年、これを彼の編著の形で公刊したからである。前述したゾンバルト研究文献9)がこれである。

これはおよそ30名の諸国の学者からの30数編の論考などをもとに、巻

毎のバックハウス教授の「序説」つきで、全三巻、総計 1,000 ページを超える大著として公刊された。しかも全体的に見ればきわめて多面的、網羅的かつ緻密なゾンバルト研究文献となったのである。

9)のバックハウスの編著『ヴェルナー・ゾンバルト (1863-1941年)、社会学者』全三巻、1996年の第1巻には、「彼の生涯と業績」にかかわるゾンバルト研究の論考 15編が収められている。

その第2巻には、「彼の理論的接近方法の再考」に関連して、ゾンバルトの都市の理論や人口論などを批判的に論述した論考 12編が収載されている。

そして最後の第3巻には、ゾンバルトの学問的業績の各国、各方面での受容の現状とそれまでの経過についての七つの論文が収められている。そしてその巻末には、英語でのゾンバルトの学問的業績およびゾンバルト研究の著作や論文、ドイツ語でのゾンバルトの著書と論文、最後に日本語でのゾンバルトの著作、ゾンバルトの評伝、ゾンバルト研究の著作や論文についての一覧表がある。

この英文のゾンバルト研究文献9)の全三巻が公刊された四年後の2000年、すなわち、20世紀最後の年に、いわばバックハウス編著のゾンバルト研究を締め括るかのよう、ゾンバルト研究の「批判的総括」の形をとって同じ編者によって独文の一冊の著書が刊行された。すなわち、ゾンバルト研究文献10)『ヴェルナー・ゾンバルト (1863-1941年) —社会諸科学の大家—』2000年、がこれである。

この著作には、バックハウスの「序言」の後九編のゾンバルト研究論考が収められている。その九編の論考の内、五編は同じ執筆者の同じテーマの論文としてすでに前述英文版全三巻の内に収載されているものの独文版であり、一編は強いていえば英文版の改訂論文といえぬこともないものであろう。一例をあげよう。ゾンバルト研究文献8)の著者レンガー教授の英文論考 *Marx, the Crafts, and the First Edition of Modern Capitalism* (第



2巻所収)は、ここでは *Marx, das Handwerk und die erste Auflage des Modernen Kapitalismus* となって収められている。

バックハウス編のこれら四冊の文献の内容には、これ以上立ち入らないことにしよう。かわってここでは、四冊の内に収載されたただ一人の日本人の業績のみを記するにとどめたい。

金森誠也教授<sup>1)</sup>は英文版第3巻に、*Sombart's Bibliography in Japanese* としてゾンバルトの著作およびゾンバルトの評伝の邦訳書計六点、ゾンバルトに関する邦文研究書二点、ゾンバルトに関する邦文論文11点を表示されている。また独文版には論考 *Die Ähnlichkeiten der Ansichten von Werner Sombart und Ekiken Kaibara auf dem Gebiet der Gesundheitswirtschaft*。(保健経済領域でのヴェルナー・ゾンバルトと貝原益軒との諸見解の類似性)が収載されている。

ハイルブロンでの1991年のゾンバルト・シンポジウムにはじまり、レンガーのゾンバルト伝、バックハウス編のゾンバルト研究の四冊目の出版の2000年に至るまでの、20世紀末のゾンバルト・ルネッサンスのいわば最盛期の10年が過ぎた。では21世紀に入ると、その様相にはどのような変化がみられたのであろうか。

---

1) ちなみに金森教授は、つとにゾンバルトの著作の邦訳を手がけられてきた。邦訳書を公刊年次順に並べてみると次のようになる。

- a. 『恋愛と贅沢と資本主義』論創社、1987年。
- b. 『ブルジョア、近代経済人の精神史』中央公論社、1990年。
- c. 『ユダヤ人と経済生活』荒地出版社、1994年。
- d. 『戦争と資本主義』論創社、1996年。

周知のようにゾンバルトは、主著『近代資本主義』全二巻、1902年の初版で論述した諸テーマについての研究を一層深化させ、もって名実共なるドイツ新歴史学派経済学の最後の最重要業績とすべき、その改訂第2版、全三巻六冊、1916-1927年、出版のための準備的諸著作を公刊した。いわばその殆ど全部を金森教授は邦訳されたのである。原著の公刊年次を見ると c)の原著が1911年、a)とd)の原著は、それぞれ『近代資本主義発展史のための研究』の第1巻、第2巻であり1913年、b)の原著も1913年である。

バックハウスが金森論文の文頭に寄せられた「編集者の前がき」(独文版、259ページ)に見られるように、金森教授がゾンバルト『近代資本主義』を全訳中であるならば、日本の学界のためにも一日も早いその出版をお祈りしたい。

21世紀はじめの目下（2004年9月）の所では、20世紀末の余波が依然として襲っている、といえる状況なのではなかろうか。

私の手許には、次の二点のゾンバルト研究文献がある。その第1は、

- 11) Joachim Zweynert, Daniel Riniker, Werner Sombart in Rußland.  
Ein vergessenes Kapitel seiner Lebens- und Wirkungsgeschichte,  
Marburg 2004.

である。

この著作は、前掲バックハウス編の英文版ゾンバルト研究文献の第1巻の筆者の一人でもあるプリダット (Birger P. Priddat, 1950-) およびリーター (Heinz Rieter, 1937-) 両教授編の「ドイツ語圏経済学史叢書」(Beiträge zur Geschichte der deutschsprachigen Ökonomie) 第19巻として世に問われたものである。

著者たちは、共にペテルスブルクでロシア精神史を研究した人たちであり、その一人ツヴァイネルトはドイツの経済学者、リニカーはスイス人スラブ学者である。

この著作は、ロシアにおけるゾンバルトの思想や学問の受容の、さまざまな局面について、微細な点にまで立ち入った、しかも多数の資料的検討の結果にもとづいてなされた、ロシアの歴史的発展に即しての初の解明の書である。

この著作のテーマは、20世紀末のゾンバルト・ルネッサンスのテーマからは、形の上では一応外れてしまったものではあった。しかし本書は、同時にレンガーの『ゾンバルト伝』の空白部分を、綿密な資料的検討にもとづいて埋めるものでもあった。またこれは、何らかの形でバックハウス編のゾンバルト研究文献の内に加えられて然るべき内容のものでもある、ということができるであろう。

この著作を通して筆者が印象づけられたことの一つは、ゾンバルトが西欧におけるアングロサクソンの近代化には、批判的な立場をとっていたこ

とである。それは、結局、ドイツのロマン主義的、全体主義的社会理想に忠実、経済にたいする国家の優位性を正当化して資本主義に批判的、という、ドイツに特有な精神的・学問的風土でもあったのだ。この点でヨーロッパにおける後進国でもあったロシアの精神的・学問的風土全体も、ドイツのそれに類似しており、これにたいして、ゾンバルトはかなりの親近感をもっていたと見てよいであろう。

その第2は、本稿であげる最後のゾンバルト研究文献であり、2004年8月漸く私が入手できた最新のものでもある。すなわち、

- 12) Robert Brandt, 1967- und Thomas Buchner, 1974- (Hg.),  
Nahrung, Markt oder Gemeinnutz. Werner Sombart und das vor-  
industrielle Handwerk, 253 S., Bielefeld 2004.

がこれである。

この著作は、ドイツ初期近代（ゾンバルトのいわゆる初期資本主義の時代）の歴史専攻の研究者たちの論文集であり、ブランド、ブーフナー両編集者のものを含め計六編の論考が全巻253ページの内に収められている。

まずこの著作成立の由来を述べておこう。

2003年4月はじめ、フランクフルト大学で次のようなテーマで、ドイツ初期近代史の研究者たちの小研究会が催された。すなわち、「生業(Nahrung)、市場ないしは公益(公共利益 Gemeinnutz)―前工業的手工業はどう行われたか、ないしはゾンバルトの„生業”のイデーは今日まだ有用なのか?」がテーマであった。そしてこの小研究会への参加学究の研究報告や討論をもとに、いわばその中間的総括のような形でまとめられたものが、この著作なのである。

それゆえ「ヴェルナー・ゾンバルトと前工業的手工業」の副題をもつ『生業、市場ないし公益』と題するこの論文集での各論考は、ゾンバルトの『近代資本主義』における経済体制の思考の基本的考え方の一つ、すなわち、前資本主義的経済体制に支配的であったとする経済志向、換言すれ

ば、身分に応じた欲求充足原則や「生業」のイデーに向き合わざるをえないことになるであろう。

本書に収載された全六編の論考の内、最初の二編はドイツ新歴史学派経済学の最後の巨匠ゾンバルトのこの議論を、一応正面から捉えて中心テーマとなし、これのもつ意味を方法論的ないしは経済学史的に概観している。

続いての残り四編は、ゾンバルトのこの議論のもつ意味との対決を念頭におきつつも、歴史研究の専門家らしく、さしあたりはそれぞれ論考の中心テーマを、特定時期における特定地域の特定業種の経済活動の様相などの資料的検討による把握においているのである。すなわち、たとえばドイツ初期近代の（東シュヴァーベン、フランクフルト、ミュンスターなど）特定地域の（繊維、リンネルなど）特定手工業などの経済活動の在り方や、都市のツunft手工業における婦人労働の在り方などについて、それぞれ資料的検討をもとに立ち入った紹介をしている。

そして、これら個別的歴史研究中心の四論考にも共通した関心事であったはずのゾンバルトの「生業」のイデーに対しては、いかにも個性尊重の歴史家らしく、たとえば次のように述べて、それぞれのさしあたりの総括としているのである。「生業」は初期近代の社会における政治的・経済的行動の、当然のことと受容される画一的・普遍妥当の原理では決してなかった（前掲書、130ページ）とか、「生業」、市場、公益は、初期近代においてはフレキシブルに時々の歴史的背景に依拠して議論された概念であった（同、150ページ）とか、「生業」とはさまざまに使われてきた複合的な概念であった（同、220、223ページ）、といったように。

#### 4. 本稿のむすび

ゾンバルトの存命中（第1期）から、没後の半世紀（第2期）を経て、20世紀を締め括るべき1990年代はじめ頃から2004年の今日に至る（第3期）まで、彼の人物や学問的業績への評価や研究など、いわゆるゾンバルト研

究の様相の変化の流れは、おおよそ以上のものであった。

ここでは、これに関連する次の二つの事項についてのみ一言して、本稿を終えることにしたい。

その第1は、ゾンバルト研究の様相の変化の流れの特色らしいものを、まとめてみることである。

そしてその第2は、ゾンバルト研究でのその特色らしいものの生じてきた要因ないし条件とか、背景とかいったものについて総括しておくことである。

まず第1の事項について述べることから始めよう。そのためには、彼と同時代の人物であり、互いに同じ学界での戦友とでもいうべき者であり、しかも彼と同じく20世紀最高のドイツ社会学者・経済学者の一人といわれたマックス・ウェーバーについての、同様な研究の様相の変化の流れと、ゾンバルトのそれとを比較してみることが有効であろうと思われる。

周知のように、ゾンバルトより一年おそい1864年生まれのウェーバーは、その没年の1920年までの間（ゾンバルトのケースでの第1期）には、1890年前後のごく若い時代の若干の著作を除いては、殆ど論考のような形での研究業績のみを公表してきたようである。それはいわば、将来一大伽藍を構築することになるはずの、巨大な柱の群がバラバラに建っている風景にもたとえられよう。したがってウェーバーの存命中には、ウェーバーの学問的業績の全体像が仲々把握できず、このような要因も加わってのことであろうか、ウェーバー研究を直接に対象とする著作のようなものも見られなかったようである。

1920年、56歳という若干早すぎると思われるウェーバーの死にたいしては、当時の著名な哲学者や社会学者たちの追悼の論考などが、比較的多く寄せられた。そしてこのゾンバルトの意味での第2期のウェーバー研究の作業は、その最も基礎的な準備作業、すなわち、彼の断片的に公表された論考類などをテーマ別に分類整理して、それぞれ著作の形にまとめて

公表するといった作業からはじまった。そしてそれは、何人かの編集者をえて『宗教社会学論集, 全三巻』(1920-1921年), 『政治論集』(1921年), 『学問論集』(1922年), 『社会・経済史論集』(1924年), 等々の著作の形で、彼の没後数年の内に10冊前後のものが公刊されたのである。これによって、はじめてウェーバーの学問的業績の全容が、それに関心をもつ人々に漸く見渡しうるような素地ができたのだ。

さらにはウェーバーの没後三年には、既述のように当代ドイツ一大社会科学者の死去を悼むに相応しい、立派な追悼記念論文集, 全二巻 (Hauptprobleme der Soziologie. Erinnerungsgabe für Max Weber, 2 Bde., Hrsg. v. M. Palyi, München u. Leipzig 1923.) も出版された。この論文集の巻頭には、ゾンバルトの論文「社会学の端緒」(Die Anfänge der Soziologie) が収められている。しかし皮肉なことに、このような立派な形でのゾンバルト追悼記念論文集の刊行がなかったことは、既述したとおりである。

尤もゾンバルトのケースでは、1933年、シュモラー年報第56巻中に彼の古稀を祝う記念号が作成されている。それゆえ彼の追悼論文集が公刊されなくても、それは特に異常なことでもなかったのであろう。この古稀記念号によって、ドイツ新歴史学派経済学の最後の巨匠ではあるが、それまで毀誉褒貶の定まらなかった「一匹狼」の観のあるゾンバルトは、ともかくも、ドイツ当代一流の経済学者として公認された形になったわけである。ただし、ドイツ新歴史学派経済学の創始者であり、ゾンバルトの師でもあったシュモラーの古稀記念論集『19世紀におけるドイツ経済学の発展』全二巻, 1908年 (Die Entwicklung der deutschen Volkswirtschaftslehre im neunzehnten Jahrhundert, 2 Theile, Leipzig 1908.) のような、全巻1,500ページになんなんとする、まさに往時のドイツ経済学界を総動員した40編にも及ぶ豪華絢爛たる大記念論集とくらべると、ゾンバルトのそれは、まことにささやかなものではあった。しかも、ゾンバルトも、またマックス・ウェーバーも、シュモラー古稀記念論集の執筆者とはなっていなかったのだ。

るが。

またウェーバーの没後六年にして、彼の妻マリアンネによる『マックス・ウェーバー伝』(Marianne Weber, Max Weber. Ein Lebensbild, Tübingen 1926.) が公刊された。これは、本文 700 ページを超える大作で、まさにウェーバーの最も標準的な伝記ともいえる水準のものであった。ゾンバルトのケースでは、彼の没後半世紀以上も経て漸く出版された(第3期)、既述のレンガーの『ヴェルナー・ゾンバルト伝』1994年、に相応するものであろう。

マックス・ウェーバー没後から(ゾンバルト的意味での第2期)は、比較的早い時期から、かなりの数量にのぼるウェーバー研究についての著作や論文類が公表された。この点でも、ゾンバルト研究の第2期とはかなりの程度の相違をみせている。

しかもウェーバー研究の第3期に入ったともいえる1980年代からは、委任された五人の編集者による全30数巻に達する『マックス・ウェーバー全集(Max Weber, Gesamtausgabe, Tübingen.)』が公刊されはじめた。ウェーバー研究の量質共なる最盛期は、これとともに進行してゆくことになるであろう。残念ながらゾンバルト全集といったものの試みについては、筆者は寡聞にして承知してはいない。

このようにしてウェーバー研究は、彼の没後の1920年代はじめから21世紀はじめの今日まで(第2期、第3期)に亘って、つねに量質ともにかなりの水準の研究文献が、公表され続けているということができよう。

また第2次大戦後のわが国においても、このような状況に呼応するかのよう、すぐ思い浮かぶ私の身近な人だけでも、山田高生教授の他にも、私の先輩で「比較研究としての社会学」の副題をもつ『マックス・ウェーバー研究』創文社、昭和32年の著者金子栄一、中村貞二の諸教授など、すぐれたウェーバー研究者による、良心的かつ高水準のウェーバー研究文

献にめぐまれている。のみならず、多くのウェーバーの業績も邦訳され、さきのマリアンネ・ウェーバーの『マックス・ウェーバー伝』をはじめ、いくつものウェーバー研究書までも邦訳されているのが現状である。

これに反し、わが国戦後のゾンバルトの業績の研究者、邦訳者としては、私の身近ですぐ思い出せるのは、ただ金森誠也教授のみであり、彼の多大な努力のみが光っているように思われる。

第2の事項に移ろう。ゾンバルト研究の様相の変化の流れを生じさせた最も基本的な要素は、それぞれの研究者自身の学問的資質や関心や着眼点、等々に依存することは論を俟たない。しかしその研究者にゾンバルト研究をえらばせたのは、その研究対象自身、すなわち、ゾンバルト自身の学問的業績や人柄などに、強い学問的魅力や共感もてたからに違ひなからう。そこでまず、ゾンバルトのそのの様相を、ウェーバーのそれと比較しつつまとめてみよう。

まず第1に注目すべきは、両者の関心の中心となった学問的領域の違いや、学問的研究への基本的態度の相違であろう。

ゾンバルトはドイツ新歴史学派経済学の最後の巨匠として、文学的・芸術的センスの豊かな経済学者であった。そして均斉のとれた統一体としての構築物のような姿で、近代資本主義体制を観念し、これに研究関心もち続けていた。しかしゾンバルトの社会科学的研究においては、ドイツ的という色彩が常にその根底にあるのが見えかくれしているように、私には思われる。同時に彼は、大学教授にしてはじめてマルスクをほぼ正當に理解しえた人と称された若い時代より、社会主義、マルクス主義への関心も、終生もち続けてきた。この場合にもゾンバルトは、人間生存の基本形態としての人間の共同生活、したがってその基本単位としての国民生活（たとえばドイツ国民生活）と、それがうみだした文化への敬慕、尊重の心構えを常にもっていた。別の言葉でいうならば、ゾンバルトは学界デビュー当初から、一種の文化理想主義的・国家社会主義的立場から、社会主義、マル



クス主義に対峙し続けてきたともいえるであろう、と私はひそかに考えている。

別の言葉で表現しよう。ゾンバルトの学問は、反リベラル的・反デモクラシ的な特殊ドイツの性格をもち続けていた、といえないこともなからう（ゾンバルト研究文献（9）、第1巻、Bernhard vom Brocke の論文、90ページ参照）。これに反しウェーバーは、一応毅然たるリベラル的・現代（欧米）人的立場から、社会科学的研究に取り組んだ、といえるのではなからうか。

ウェーバーは社会科学に、価値評価から解放されたものとしての、その学問的厳格性を生涯求め続けた。そしてたとえば、理念型とこれへの適合度の形で、社会科学の法則性を理解しようとしたのである。

またウェーバーの、学問的着想の雄大さやその切り口の斬新さや鋭さにも注目すべきであろう。彼が西欧近代を、「世界の魔術からの解放」のプロセスとしての、近代化、合理化の過程として捉えようとし、これをもとに官僚性や（カリスマ的・伝統的・合理的）支配の三類型、等々の理解を試みたことも、その一例であろう。

さらには両者の人柄の相違も、かれらについての研究の様相の変化の流れを左右させた条件の一つ、となったかも知れない。これについては、ここでは1920年代頃からのゾンバルトのそれについてのみ、再述しておこう。

ウェーバーの早すぎる死の頃から、ないしはゾンバルトのベルリン大学教授への就任後の頃から、彼は学界などから「孤高の人」とか「一匹狼」とかいわれ、若干尊大で気まぐれの気むずかし屋、そして同僚や後進の学問的業績への冷たい、ないしは否定的評価への性向をもつ、などと比較的非友好的に見られてきたこと、既述のとおりである。

最後に、ゾンバルト研究の様相の変化の流れを左右したかも知れない一般的・外的条件について、ゾンバルトの祖国ドイツを中心に総括して、本稿を閉じることにしよう。

それは結論的にいえば、ドイツを中心に考えても、また世界史的に見ても、二つの20世紀最大の政治的・社会的・経済的大事件に密接にかかわるものであろう。すなわち、その一つは、第1次・第2次世界大戦であり、もう一つは、社会主義的・マルクス主義的諸国家の生誕と消滅ないし衰退である。

これらのことを時系列的に要約しておこう。

まず1910年代末の、第1次世界大戦の敗北にともなう戦後ドイツの大混乱や、破局的インフレーションなどを含む1920年代のドイツの社会的・経済的大困難がある。これとともに、戦前には所詮は思想や理論の領域の問題にすぎなかったマルクス主義、社会主義が、これを基礎に現実的にも、巨大国家ソビエトの建設に向かわせていったことも、見落とすことはできないであろう。そしてこれは、1930年代のナチスの政権掌握による社会や国民の全面的統制と、ドイツの第2次世界大戦の突入へと続くのである。

1945年の第2次世界大戦でのドイツの敗北と、これにともなうナチス・ドイツの解体がおり、やがて「ベルリンの壁」に象徴される東の共産主義国ドイツと、西の資本主義国ドイツとへの、ドイツの東西ドイツへの分裂と対立がはじまった。これは世界的規模では、西側自由諸国とソ連邦支配のもとでの東欧諸国や中国など東側共産諸国とへの、分裂と緊張関係の発生となったのだった。

いわば世界の冷戦時代ともいうべきこの時代の様相は、1989年のいわゆる「ベルリンの壁」の崩壊の頃には、大きな変化を見せることになった。20世紀末におけるドイツの、東側共産ドイツの消滅にともなう再統一は、ソ連や東欧諸国の例に見られるように、実は世界的規模で展開された共産主義諸国の消滅や衰退のドイツ版であったのだ。このようにして、20世紀も終りの頃になって漸く西側自由諸国中心の、平和的な国際協調の時代が到来することになったわけである。

以上のような 20 世紀のドイツおよび世界の政治的・社会的・経済的境遇の変化の流れ，という背景。これはゾンバルト研究者たち，特に彼の社会主義研究領域に関心をもった研究者たちにたいし，研究者それぞれの国籍，活動した時代次第では，そのゾンバルト観を大きく左右することになる可能性をも生み出すことになったかも知れないであろう。